

「Endoscopic Retrograde Cholangiopancreatography = 英文版」

編 集 竹 本 忠 良 山口大学教授
春日井 達 造 愛知県がんセンター病院副院長

宇部興産中央病院副院長

久 保 勝 彦

●観迎される輸出—ERCPに関する最初の英語版テキスト

今般、竹本忠良教授、春日井達造博士の共同編集になる「Endoscopic Retrograde Cholangiopancreatography」が刊行されることとなったが、本書は日本人エキスパート24名による最初の ERCP に関する英語版テキストである。

周知のごとく、消化管内視鏡の領域は、わが国の研究者が世界をリードしている数少ない分野で、学問として体系づくりへの努力が行われている。特に幽門輪、Vater 乳頭と括約筋制禦下の2カ所の障害をくぐりぬけて、膵、胆管を造影するという特技は、従来みられた日本人固有の器用さのみで解決されるものでなく、科学的に、胃、十二指腸、胆道、膵の解剖、運動分泌生理をきわめ、さらに、本書のすみずみにまで溢れる編集者、執筆者の並ばならぬ気魄により可能となったものであろう。

全 338 頁、収録したX線フィルム

は 300 枚に近く、その中に72枚の見事なカラー写真を含んだ内容の豊富さは、そのほとんどが執筆者自身の成績であり、各位の日常の努力の現われとして高く評価されるべきものと考えられる。

さて、本書の内容について述べる。と、膵、胆管内視鏡の歴史、十二指腸ファイバーの挿入と観察から始まり、13章にわたって ERCP に関する手技、得られた正常像、異常像の記載はもとより胆管像や、親子ファイバーによる膵、胆管の直接視診、内視鏡的な Sphincter papillotomy などの広い面について最新の data が示されている。

特に本書では膵外分泌機能との対比に章をさいている点でも判るように、単なる Atlas ではなく、膵疾患診断上での新しいよりどころとしての ERCP について強調されている点にも感銘をうけた。

日本膵臓病研究会を中心とした多くの努力により、診断基準の整理が

なされ、共通の舞台での討論が始まると共に、膵疾患の臨床は急速な進歩をみせているが、更に新しい一歩をふみだすためにも本書の登場は意義深いものといえよう。

なお本文の英語は、極めて平易、明快であり、広く海外に you are quite welcome といわれてうけ入れられ、日本医学の高い水準を示すことは疑いない。

さらに一言付言すれば、円高の逆効果のためか、国内購入者にとっては入手し易い価格のように思われる。

わが国の消化器病診療従事者、特に若い医師、ないし学生諸君には、国際学会参加、英文論文発表など将来の海外での活動にそなえて、是非、御一読をお薦めする次第である。

B 5, 頁 338, 図56, 写真213, 原色図72
表 59, 1979, ¥ 12,000, 〒 300

<医学書院刊>